

# データはヒト、モノ、カネに続く第4の経営資源

## 「データマネジメント概説書」とは

JDMC『データマネジメントの基礎と価値』研究会

### 社会環境とITの変化がデータの多様性、重要性を増している

企業の情報システムを取り巻く近年の社会変化は激しさを増しています。

グローバル化の進展・顧客セグメントの細分化などが進み、管理すべきデータの種類・量が膨張しており、看過できない経営マターとなってきています。

同時に、業務の複雑化、ITの進化により、個別システムの増加とそれに伴う膨大な業務データの蓄積、EXCELなど簡易ツールの増加、データの発生元・加工プロセスの複雑化によりデータの散在や重複が発生している現状があります。

これまで企業が情報システムで取り扱う情報は、主に社内システムで発生する静的な、いわゆる基幹データと呼ばれるものが中心でしたが、最近では、ビッグデータと言われる動的で膨大なデータやオープンデータに代表される社会で共用するデータなど、その種類と活用領域が劇的に大きくなっています。

#### 社会環境とITの変化



そのためのデータの管理技術も、従来の基幹データアプローチから、ビッグデータアプローチ、オープンデータアプローチへと試行錯誤がされています。

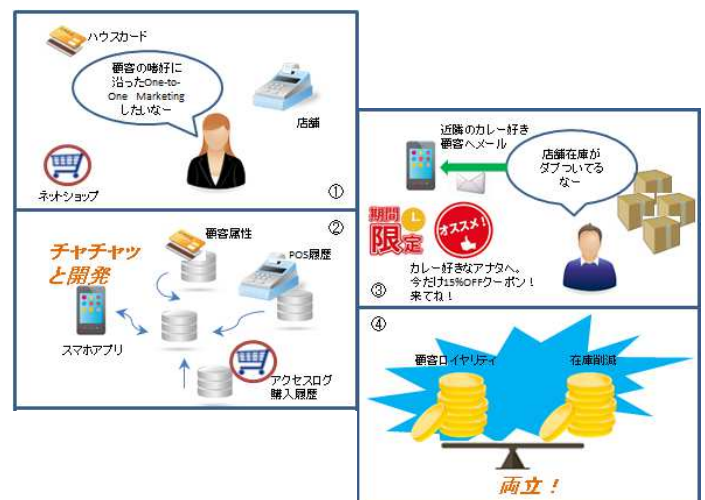
時代とともに変わるデータの種類によって管理技術のトレンドも変わってきているのですが、そもそもデータを管理することで何が得られるのでしょうか。身近なケースを想定してみましょう。

### データ重視企業の実践例

データを適切に管理できている企業では次のようなことができます。

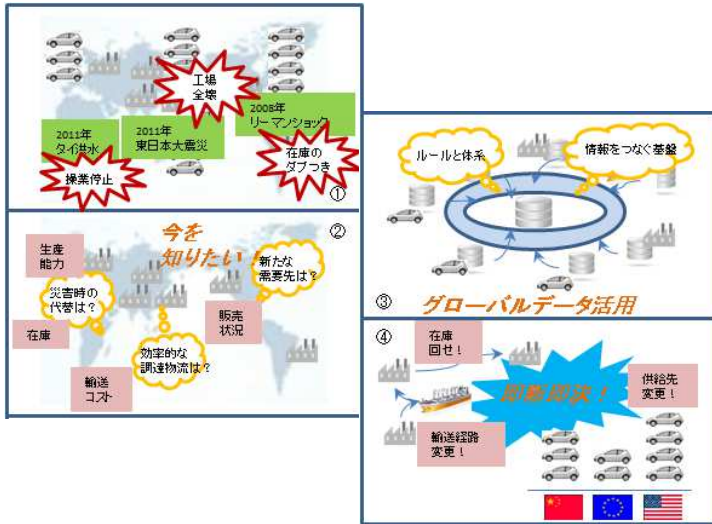
#### ・オムニチャネルの活用によるロイヤリティーの醸成と収益モデルの変革(小売流通業)

従来から、商品の在庫が単品管理されているだけではなく、店舗在庫、物流在庫含めてリアルタイムに把握できており、販売チャネルごとの購買動向を顧客に紐づけることさえできれば、One to One Marketingをすぐに始められる環境であった。



## ・グローバルデータ活用による生産リスクの回避と売上機会のキャッチアップ(製造業)

グローバル展開する各現地法人の裁量を制限することなく、メリハリを利かせたデータガバナンスの「ルールと体系」と「情報をつなぐ基盤」を構築し、グローバル全体で明細データを追える環境づくりを推進できた。



## ・経営が要求する判断材料を柔軟に提供できない (前述の製造業の場合)

生産データ、販売データの管理が現地法人ごとに異なり、必要なデータを集約するのに、多くの時間と労力が必要である。



データを軽視し放置していることは、経営資源を雑に取り扱っていることであり、今やずさんな経営と評価されかねません。

## データ軽視企業の例

一方でデータを軽視していると次のようなことが危惧されます。

## ・事業戦略に合わせたタイムリーなサービスがリリースできない (前述の小売り流通業の場合)

在庫管理のルール、データ粒度がバラバラなまま複数システムで在庫データが分断された状態である。



## データは第4の経営資源

我々JDMC研究会では、データというものに関して次のような考えを持っています。

・情報システムの中を流れるデータが適切な状態で維持/管理されていなければ、ICTをビジネスで有効に活用していくことができない (※データマネジメント概説書 序「本書執筆の背景と問題意識」から要約)

今や企業活動に情報システムは不可欠です。そして情報システムで取り扱われているのはデータです。システムの中をデータが流れることで業務が行われているのです。そのデータが適切に管理されていないとすれば、いくら高度な情報技術を使っていたとしてもビジネスで有効に活用できる状態にはならないと考えています。

・データの不全(データの信頼性の低さ、データ品質の劣化)が、企業の信頼性の低下や経営品質の劣化を招く (※データマネジメント概説書 序「本書執筆の背景と問題意識」から要約)

データの改ざんはもとより、正確で最新のデータを適切に取り扱うことができていることによって、企業そのものの信用や経営の質を問われる事案が現実には発生しています。データの不全は今や経営にダメージを与える大きな要素となっているにもかかわらず、データ軽視の企業が多すぎると考えています。

## 経営資源としてデータを管理するための要点

データを経営に貢献できる情報資源とするために、適切なデータの管理の要点について我々が主張するのは次のことです。

### ①データ品質管理

データの品質を管理するとは、具体的には「精度」、「鮮度」、「粒度」という品質を作り込み、劣化しないよう維持することです。

### ②データガバナンス

データガバナンスとは、作りこんだデータ品質を維持し活用するための利用環境（「ルール」、「責任」）を整備することです。

### ③データ利活用

データの利活用とは、データが経営に貢献できる情報資源となっている場合、意思決定の質的向上、業務効率化、リスク抑制のために有効にデータを利活用することです。

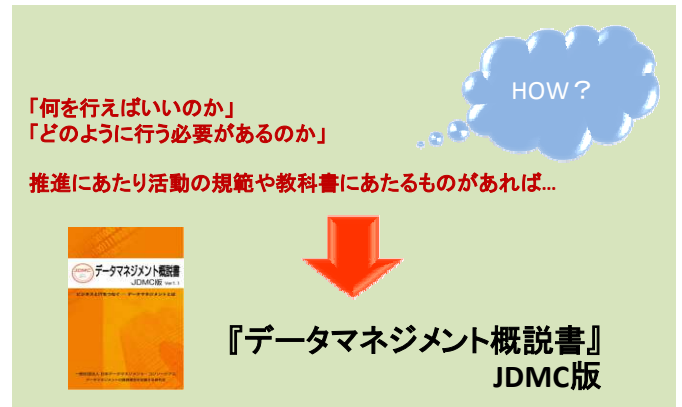
データを利活用できる状態にするためには、データ品質管理とデータガバナンスができていなければならないことが必要です。

また、欧米とは異なり、トップダウンではなく、ミドルマネジメント層がリードして推進していくのが、日本の組織運営の風土に適していると考えており、①データ品質管理、②データガバナンス、③データ利活用は日本において「ミドルアップダウン」ともいふべき現場に近いマネジメント環境で行われます。



## 「データマネジメント」という概念

我々はデータを企業経営の情報資源として定義しています。この考えのもとにデータマネジメントの基本原則・原則を「データマネジメント概説書」として書籍化しました。管理対象とライフサイクル、そして具体的な活動のタスクを定義した、データを重視するすべての方へ向けた概説書です。



## 我々の思いと願い

我々は、「データ」を、ヒト、モノ、カネに次ぐ経営資源であると考えており、データマネジメントは、「データをビジネスに活かすことができる状態で継続的に維持、さらに進化させていくための組織的な営み」と定義しています。データマネジメント（によって得られるビジネスでのデータ活用価値）が経営者に認知され、企業・組織にとって空気のように当たり前の存在になっていることを切に願ってやみません。

そのために、企業・組織の中にデータマネジメントの専門家や組織があり、その責任と業務が機能し、継続性を持った活動ができていること、またその成果が事業・ビジネスや経済の活性化に繋がっていることを目指して、日々、啓発・普及活動を続けています。

「データマネジメント概説書」を、我々の思いを共有いただける方やこれからIT技術者として社会を支える多くの方々へ活用していただけることを望みます。



**お求めはこちらから**

# Kindle版 データマネジメント概説書 ビジネスとITをつなぐーデータマネジメントとは

データマネジメントの全体像を俯瞰し、その構成要素を解説する。  
また、企業／組織における位置づけ、実践に必要な具体的活動内容を示す。  
データマネジメントに関心を持つ、すべてのビジネスパーソン必携の参考書。

## 目次

- 序 本書執筆の背景と問題意識
  - 本書の狙い
  - 関連資料体系
- 1 データマネジメント概説
  - 1-1 データマネジメントとは  
データマネジメントとは何か  
必要と背景  
目的と活動基本概念(データ品質とデータガバナンス)
  - 1-2 データマネジメントにより実現すること  
例1:事業活動の見える化/KPI管理  
例2:MDM(マスタデータマネジメント)  
例3:その他の例(社会的な波及)
  - 1-3 データマネジメント実現の難しさ
  - 1-4 経営資源管理としてのデータマネジメント実現のために
  - 1-5 データマネジメントに関する技術動向  
技術動向とツール  
標準化動向と本書の関係  
トレンドキーワード
- 2 データマネジメントの全体像
  - 2-1 データマネジメントライフサイクル
  - 2-2 データマネジメント構成要素体系
- 3 データマネジメント構成要素詳細
- 4 付録
  - 4-1 用語説明
  - 4-2 今後の改版予定
  - 4-3 参考文献
  - 4-4 執筆者

デジタル時代において、ITによるビジネス変革を実現するには、その源泉となる「データ」が益々重要になっています。データの管理や活用に向けて、その全体像を把握するための教科書として、特に若手のIT技術者、ビジネスパーソンに手に取ってほしい一冊です。

(社)日本データマネジメント・コンソーシアム  
会長 栗島 聡



## データマネジメント概説書

JDMC版 Ver.1.1

ビジネスとITをつなぐーデータマネジメントとは

**【価格】 税込359円**

**スマホで今すぐ  
アクセス!**

<http://goo.gl/BfVpov>



**Amazon にて!**

Kindleストア ▾ データマネジメント概説書 検索